

道免和久 編

脳卒中機能評価・予後予測マニュアル

大田仁史（茨城県立健康プラザ・管理者）

いまや国民病と言われる脳卒中はリハビリテーションにかかわるすべての人に避けて通れない疾患である。しかも、脳卒中の現す病態はリハビリテーションに携わる者にとって勉強に事欠くことはない手ごわい対象でもある。現在、リハビリテーション医療の治療はエビデンスに基づいたものが強く要求されるようになり、なかでもきちんとした機能評価と予後予測なしでプログラムを組むことは、めざすべき港のない漂流船が海図なしで暗闇の海原を航海するような無謀極まりないものと言われるようにさえなった。すなわち機能評価・予後予測は必須中の必須になっている。しかしその全貌を理解するためのわかりやすい書はこれまで見当たらなかった。

本書には、評者が敬愛する道免和久教授の「患者の QOL をどう支えるか」というリハビリテーションの思想が基軸にあり、教授のリハビリテーションに対する熱い思いがこのマニュアル書を貫いていることがよくわかる。特に第Ⅰ部の第 1 章から第 4 章は、あたかも道免教授から直接実践統計学の講義を受けているような気さえする。洗練された文章は読みやすく、しかも無駄がない。後期高齢者の筆者は、臨床にいるときに出合えばよかったという思いに包まれ、現在の臨床家は幸せだとさえ思った。

本書には実際の評価法が十二分に紹介されている一方で、時間や手間のかかり過ぎるのは一般には使われないとして評価法が精選されている。しかもエビデンスの高いものばかりである。その意味では脳卒中リハビリテーション医療の教科書的価値があると思う。

本書は計Ⅳ部構成で、第Ⅰ部は「予後予測のための脳卒中機能評価」で 11 章からなる。第Ⅱ部は「脳卒中機能予後予測」で 6 章からなり、第Ⅲ部の「予後予測の実践事例」では 7 つの症例が紹介されている。第Ⅳ部は「評価マニュアル」で、加えて 2 つの付録からなる。

読者は、まず本書の全貌をつかむために、目次から第Ⅳ部の評価マニュアルまでページをめくってほしい。ついで第Ⅰ部の 1～4 章の道免教授担当の章を読む。教授の思想を身につけるためである。理解は 7 割くらいでいいので 1 日のうちにここまで通読する。そして 10 章、11 章に目を通す。これらの章は 10 章の一部を除いて道免教授が担当されたものである。

本書の「序」で道免教授は「本書の最終的な目的は『よく当たる予測法』をマスターすることではない」とし、「多くの因子が関わる予後予測を適用しながら、これらのことを考える習慣が身についたとき、読者の臨床力はきわめて高いものになっていることであろう。さらには、……予後予測に含まれない多様な臨床因子が頭の中に浮かび、患者のリハビリテーション後の帰結が確率分布ようにイメージできるようにするはずである」と読者にエールを送っている。

脳卒中のリハビリテーションにかかわる全国のリハ医、PT、OT、ST の座右の書にしてほしい。

（B5 頁 288 2013 年 定価 4,725 円（本体 4,500 円＋税 5%）[SBN978-4-260-01759-6] 医学書院刊）